

李 亦萱 (リ イセン)

中国出身

上智大学 文学部新聞学科

故郷

コロナのせいで、もう2年以上故郷に帰っていません。今年23歳の私はまだまだ若いかもしれませんが、故郷への思いはそれほど強くはありませんでした。ただ、去年の夏に祖父が亡くなったということを除けば…。

祖父が亡くなった時はちょうど80歳の誕生日をお祝いをした後でした。彼は80年の人生をずっと私の故郷である一つの小さな島で過ごしました。祖父について覚えているのは、彼は植物が好きで、人生の残りの20年間はほぼ毎日、蘭の栽培に力を入れ、それを市場で売ったりして過ごしていました。祖母の話によると、若い頃は海軍で、白い船一隻を指揮した祖父は毛沢東を最も尊敬し、家の中には大きな毛沢東と天安門の画像がずっと飾られていました。私はふと思い出しました。故郷を出たことのない祖父に、私が言った最後の言葉は、「今度家に帰ったら、皆一緒に北京に旅行しよう。毛沢東さんを見に行こう」ということでした。そして普段口数が少なかった祖父は久しぶりの笑顔を見せてくれました。

日本に来て5年目を迎える私は、家族とのビデオ電話で祖父が永遠に目を閉じた顔を見て、久しぶりに故郷を思うようになり、故郷の海、日本のようなきれいな海ではなく、漁業の興隆で少し濁った黄色の近海を見たくな

りました。

ずっと外の世界を、もっと大きな世界を見に行きたいと思っていた私は、故郷を離れ、留学を決め、今でも、いつも未来のことしか考えていません。まだ若いので、憂愁を知らず、自分がこの世に存在する意味を見出すことに精一杯でした。



「此の心の安らかなる処は是れ吾が郷なり」これは私が好きな詩です。毎回、家族や友達から「日本で1人でいるのは寂しくないの？帰らなくても寂しくないの？」と聞かれると、私はこの詩で答えます。自分が安心感を持てるなら、どこでも故郷になれます。

祖父が亡くなった時を除けば。

記憶力がそこまで良くない私にとって、あの瞬間、色んな人を思い出しました。両親、祖母、高校時代の友達、数学を教えてくれた先生…彼らは今どこにいらっしゃるのでしょうか？私たちの間でまだ果たせていなかった約束はあ

るのでしょうか？いつのまにか忘れてしまった過去の物事の中には、年と共にぼやけていく記憶の欠片が残されています。それを考えたら、私は人生で初めて恐怖を感じてきました。

毎年春には、故郷の花がまた咲き、近くの海はまた暖かくなってきますが、故郷の人はどうでしょう？消えていった人々はどこにいったでしょう。結局、自分が故郷について唯一確信できることは、私が持っている記憶の欠片なのでしょう。

「忘れないで」と、自分に言い聞かせました。

以上